

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



15

よろこびの知らせ
第15集

目 次

この御名のほかに	1
使徒 4:5-12	
イエスとともに	10
使徒 4:13-22	
恵みとまこと	19
ヨハネ 1:14-18	
生ける望み	28
ペテロ第一 1:1-5	

ここに収められたメッセージは、2020年12月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖書箇所は“Gospel Project”に沿って選ばれており、聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

この御名のほかに

使徒 4:5-12

4:5 翌日、民の指導者、長老、学者たちは、エルサレムに集まった。

4:6 大祭司アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレキサンデル、そのほか大祭司の一族もみな出席した。

4:7 彼らは使徒たちを真中に立たせて、「あなたがたは何の權威によって、また、だれの名によってこんなことをしたのか。」と尋問しだした。

4:8 そのとき、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った。「民の指導者たち、ならびに長老の方々。

4:9 私たちがきょう取り調べられているのが、病人に行なった良いわざについてであり、その人が何によっていやされたか、ということのためであるなら、

4:10 皆さんも、またイスラエルのすべての人々も、よく知ってください。この人が直って、あなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのです。

4:11 『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となった。』というのはこの方のことです。

4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」

一、御名の持つ力

今読んだ箇所は、ある人が癒やされたことから起こった一連の出来事のうちの一部分です。全体が良く分かるために使徒 2:43 にさかのぼって見てみましょう。使徒 2:43-47 はペンテコステの日に始まったばかりの教会の姿を描いています。そこに「毎日、心を一つにして宮に集

まり、家々でパンを裂き」（使徒 2:46）とあります。

「家々でパンを裂き」の「パン裂き」は聖餐のことです。イエスを信じる者たちはエルサレムでは会堂から追放されていたので、安息日に会堂で礼拝することはできませんでした。それで地域ごとにそれぞれの家に集まり、聖餐を中心とする教会独自の礼拝を守りました。そして、それ以外の日は神殿に集まって祈りました。イエスが神殿を「わたしの父の家」（ヨハネ 2:16）、また、「すべての民の祈りの家」（マルコ 11:17）と言われたからです。使徒 3:1 に「ペテロとヨハネは午後三時の祈りの時間に宮に上って行った」とありますが、それは特別なことではなく、使徒たちや信者たちが毎日していたことでした。

しかし、ある日、特別なことが起こりました。ペテロとヨハネが「美しの門」というところから神殿に入ろうとしたとき、ひとりの物乞いがペテロに施しを求めました。この人は生まれつき足の不自由な人でした。ペテロは、この人が金銭を求めたのに対して、こう言いました。「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」すると、生まれてこのかた四十年立ったことも歩いたこともなかったこの人は立ち上がり、喜びのあまりおどろきました。ペテロは、この人に金銭以上のもの、どんなに大金を医者にも払ってもできないこと、神の癒やしを与えました。

もちろん、ペテロが自分の力で、この人を癒やしたの

ではありません。この人を癒やしたのは「イエスの御名」です。使徒 3:16 で、「そして、このイエスの御名が、その御名を信じる信仰のゆえに、あなたがたがいま見ており知っているこの人を強くしたのです」とペテロが言った通りです。使徒たちは、イエスが地上におられたときから「癒やし」の権威を授けられていました。それはイエスが天にお帰りになって、無くなりはしませんでした。むしろ聖霊によってより一層強められました。使徒たちは、癒やしをはじめ、力あるわざを行い、イエスが今も生きておられ、救いのみわざを行っておられることをあかししましたが。それは、使徒たちが「イエスの御名」を持っていたからでした。

初代教会はこの世の富や権力を持っていませんでしたが、この世のどんなものにも勝る霊的な権威を持っていました。何世紀か経つにつれ、教会はこの世の権力を持つようになり、それと共にこの世のものが教会に入ってくるようになりました。今日、メガ・チャーチと呼ばれる教会は、大規模な予算を持つようになりましたが、その中には「金銀」を持つようになったかわりに「イエスの御名」を失い、真理を失い、霊的な力を失っているものがないわけではありません。最近、“American Gospel” というドキュメンタリーを観ましたが、“Money!” と叫ぶ説教者や、まるでお城のような豪邸に住み、プライベート・ジェットを乗り回している TV プリーチャーが登場していました。そうすると、それはもはや神の働きではなく、宗教ビジネスでしかありません。その人たちに

は、巧みなスピーチの能力はあるかもしれませんが、ペテロのように「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう」と言って語ることができる、人のたましいを癒やす福音の言葉を持っていないのです。教会に、また、信仰者ひとりひとりに大切なことは、「イエスの御名」をしっかり保っていることです。私たちは、「イエスの御名」から来る信仰の力や希望の言葉、愛の行いを、「私にあるものを上げよう」と言って、いつでも他の人々に分かち与えることができる者であり続けたいと思います。

二、御名のゆえの苦しみ

ペテロが、この人を癒やした後、人々にイエス・キリストを宣べ伝えていると、「祭司たち、宮の守衛長、またサドカイ人たち」がやってきて、ペテロとヨハネを捕まえ、留置所に入れました。翌日、「民の指導者、長老、学者たち」が召集され、大祭司アンナスとカヤパもやってきました。ペテロとヨハネは、彼らの前に引き出され、尋問を受けました。

「大祭司アンナスとカヤパ」は、イエスを罪に定めた人たちです。アンナスはカヤパのしゅうとで、イエスはまずアンナスのところに送られ、それからカヤパに引き渡され、さらに総督ピラトの手に渡されたのです。ペテロとヨハネもイエスと同じように彼らの前に立たされましたが、これは、イエスが、あらかじめ話していた通りでした。ルカ 21:12 にこうあります。「しかし、これらのすべてのことの前に、人々はあなたがたを捕えて迫害

し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出すでしょう。」弟子たちは「イエスの御名」で人を癒やす権威を持っていました。しかし、それは、弟子たちがどんな苦しみからも守られるということではありませんでした。むしろ、イエスの御名を宣べ伝えることによって苦しみを受けるだろうと、イエスが言われた通りです。イエスは「わたしの名のために、みなの方に憎まれます」（ルカ 21:17）とも言われました。弟子たちは良いことをして憎まれました。しかし、憎まれてもなお、人々を愛して良いわざに励みました。そのことによって、福音は広まっていったのです。弟子たちが受けた「イエスの御名」のゆえの苦しみは意味のないものではありませんでした。弟子たちがその苦しみを耐え忍び、それに打ち勝つことによって、「イエスの御名」はさらに広まったからです。

今日、アメリカのキリスト者は「御名のゆえの苦しみ」を忘れてしまっているかもしれません。誰か他の人に神の愛を分かち合い、イエス・キリストを知らせようとするのは、決して楽にできることではありません。そこには労苦がありますが、そうした労苦やそのための時間をいとうようになりました。電話をしたり、Eメールや手紙を書いたりといったことでも、それを続けるのは簡単なことではありません。そうしたことは、自分の楽しみを優先させるメンタリティを持つ人には余分な労苦かもしれません。しかし、「イエスの御名」のための労苦は、それがどんなに小さなものでも、報われないものは

ありません。御名のゆえの労苦を進んでする者は、イエスの御名の素晴らしさを知り、また、それを知らせることができるようになるでしょう。

三、御名による救い

さて、祭司長たちは、ペテロとヨハネに、「あなたがたは何の権威によって、また、だれの名によってこんなことをしたのか」と言いました（7節）。それに対してペテロはこう答えました。「民の指導者たち、ならびに長老の方々。私たちがきょう取り調べられているのが、病人に行なった良いわざについてであり、その人が何によっていやされたか、ということのためであるなら、皆さんも、またイスラエルのすべての人々も、よく知ってください。この人が直って、あなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのです。」（8-11節）なんと堂々とした答でしょう。ペテロは、イエスがカヤパによって尋問されていたとき、「あなたはイエスの弟子だろう」と言われ、「わたしはイエスなど知らない」と三度もイエスの御名を否定した人物です。そのペテロが、ここでは、「だれの名によってこんなことをしたのか」との問いに、「あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのです」（8-10節）と答えています。ペテロが、ユダヤの指導者たちの前でも臆することなくイエスの御名をあかししたのは、ペテロ自身が、イエスの御名によって、強められていたからで

した。イエスの御名を宣べ伝える者は、その御名によって強められ、支えられるのです。

ペテロはさらに、詩篇 118:22 から引用して、「『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となった。』というのはこの方のことです」と言いました。「捨てられた石」とは、イエスのことです。ユダヤの指導者たちはイエスを捨て、罪に定め、亡き者としました。しかし、神はイエスをよみがえらせ、神の国の礎とされました。エペソ 2:19-20 に「こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です」とある通りです。

ペテロは、イエスを罪に定めた大祭司を前に、「あなたがたはイエスを十字架につけた」と言いました。人が犯す罪で、神の御子を殺すこと以上の罪はありません。ペテロは人々が犯した罪を責めました。しかし、それだけでなく、神はそのような恐ろしい罪を犯した者をも救うために、イエスをよみがえらせてくださったと言いました。ペテロが「あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となった」という言葉を引用したのは、神の救いの計画は、人の罪によってくじかれるものではない。人はイエスを捨てても、神は、イエスを救いの岩とされた。人はイエスを死なせたが、神はイエスを死者の中からよみがえらせた、神の救いをあかしするためだったのです。

そして、ペテロはこう宣言しました。「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」（12節）ユダヤの指導者たちは、使徒たちが「イエスの御名」によって癒やしを行い、「イエスの御名」を宣べ伝えていることを知らなかったわけではありません。彼らもまた「イエスの御名」が持つ力を認めていました。だからこそ、使徒たちがこれ以上「イエスの御名」を宣べ伝えることがないようにしたかったのです。「イエスの御名」こそ、救いの御名です。人を救う、ただひとつの御名です。それは、今も、世界中の人々が、「イエスの御名」に救われていることによって証明されています。

盲人のバルテマイは「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください」と叫んで目を明けてもらいました（マルコ 10:47）。十人のらい病人は「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください」と声を張り上げ、らい病をきよめてもらいました（ルカ 17:13）。十字架上の強盗は「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください」（ルカ 23:42）と言って、パラダイスを約束されました。ペテロは、ペンテコステの説教で「主の名を呼ぶ者は、みな救われる」という旧約の預言を引用しています（使徒 2:21）。ペテロは、イエスとともに過ごし、「イエスの御名」に救いがあることを、間近に見、彼自身もそれを体験していましたので、確信をもって、「主の名を呼ぶ者は、みな救わ

れる」ということができたのだと思います。

私たちも、聖書と、数多くの人々の証と、自らの体験によって、「この方以外には、だれによっても救いはありません」と確信することができます。「イエスの御名」には力があります。「イエスの御名」のゆえに味わう労苦には報いがあります。「イエスの御名」はただひとつの救いの御名です。どんなときでも「イエスさま」と呼んで祈り、また、人々に「イエスの御名」を呼ぶことを知らせていくために励んでいきましょう。

(祈り)

父なる神さま、あなたは、世にただ一つの救いの御名、「イエスの御名」を、私たちに与えてくださいました。何の力も持たない空しい偶像の名ではなく、神の御子、御子である神、私たちの救い主、主、王の王である「イエスの御名」を、私たちは呼び求めます。「彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れを与えよう」（詩篇 91:15）と、あなたは約束してくださいました。この約束を覚えて「イエスの御名」を呼び求め、また、人々に「イエスの御名」を告げ知らせる私たちとしてください。「イエスの御名」で祈ります。

イエスとともに 使徒 4:13-22

4:13 彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であることを知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。

4:14 そればかりでなく、いやされた人がふたりといっしょに立っているのを見ては、返すことばもなかった。

4:15 彼らはふたりに議会から退場するように命じ、そして互いに協議した。

4:16 彼らは言った。「あの人たちをどうしよう。あの人たちによって著しいしるしが行なわれたことは、エルサレムの住民全部に知れ渡っているから、われわれはそれを否定できない。

4:17 しかし、これ以上民の間に広がらないために、今後だれにもこの名によって語ってはならないと、彼らをきびしく戒めよう。」

4:18 そこで彼ら呼んで、いっさいイエスの名によって語ったり教えたりしてはならない、と命じた。

4:19 ペテロとヨハネは彼らに答えて言った。「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。

4:20 私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」

4:21 そこで、彼らはふたりをさらにおどしたうえで、釈放した。それはみなの方が、この出来事のゆえに神をあがめていたので、人々の手前、ふたりを罰するすべがなかったからである。

4:22 この奇蹟によっていやされた男は四十歳余りであった。

先週はペテロが生まれつき足の不自由な人を癒やしたことから、捕まえられ、次の日、ユダヤの指導者たちの前に立たされた部分を読みました。その時、ユダヤの指導者は「あなたがたは何の権威によって、また、だれの

名によってこんなことをしたのか」と尋問しました。ペテロは答えて言いました。「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」（使徒 4:12）ペテロとヨハネは、権力者たちに取り囲まれてもひるまず、イエスの御名をあかししました。このようなペテロとヨハネの大胆さはいったいどこから来たのでしょうか。きょうは、そのことを考えてみましょう。

一、イエスの臨在

ペテロとヨハネの大胆さは、第一に、「イエスとともにいた」ことから来ています。13節にこう書かれています。「彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるのを知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。」ここに、「無学な普通の人」とありますが、これは、ユダヤ教の教師となるための訓練を受けていないという意味です。ユダヤ教の教師を「ラビ」と言いますが、ラビになるためには、エルサレムの高名な学者の弟子になり律法を学ぶ必要がありました。しかし、ペテロもヨハネもガリラヤの漁師で、そんな訓練は受けていません。ところが、ペテロの弁論は、聖書に基づいた理路整然としたもので、そこにいた学者たちも反論することができませんでした。彼らは、自分たちも及ばないような知識を、ふたりが持っていることに驚きましたが、すぐに、「ふたりがイエスとともにいた」ことに気付いま

した。

イエスの弟子たちはいつもイエスとともにいて、イエスから学び、訓練を受けました。ラビたちは神について論じましたが、神の御子であるイエスは神ご自身を弟子たちに示しました。弟子たちは「真理について」ではなく、「わたしは真理である」と言われたお方から、「真理」そのものを学んだのです。ラビたちは律法を事細かに教えました。イエスは神の言葉そのものを明確に教えました。ある人が、「ラビたちは口ごもり、イエスは語った」と言っている通りです。弟子たちは最高の教師であるイエスの身近にいて、その人格に触れ、直接学ぶという最高の教育を受けたのです。ペテロとヨハネの知恵、力、勇気は「イエスとともにいた」ことから来たものでした。

「イエスとともに」にいたことができたのは、二千年前の弟子たちだけの特権ではありません。今日の私たちも、「イエスとともに」いることができるのです。なぜなら、イエスは復活し、永遠に生きておられるからです。「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」（マタイ 28:20）との言葉通り、私たちとともにいてくださるからです。教会は、イエスの復活の日、日曜日に礼拝を持ちます。古代の礼拝では「ドミヌス・フォビス・クム」（主はあなたとともに）という言葉が呼びかわされました。このことは、礼拝が亡くなられたイエスを偲んで集まるメモリアル・サービスではない。生きておられるイエスに出会い、イエスと

共に過ごす時だということをお教えます。復活されたイエスは、昇天までの四十日にわたって弟子たちに聖書を解き明かしましたが、私たちも礼拝で、イエスが解き明かされた神の言葉を聞き、イエスから学ぶのです。

復活のイエスがともにおられることを「臨在」（“Presence”）と言います。神の臨在は、神の「存在」（“Existence”）よりも、もっと人格的なものです。それは、神が存在しておられるというだけでなく、私たちのために、私たちとともにいてくださるということです。これは、神の存在さえも認めない人々には理解できないことかもしれませんが、どの時代の信仰者もイエスの臨在を求め、また体験してきました。とくに、ひとり静かに聖書を読み、黙想し、祈る時間を積み重ねることによって、イエスの臨在を体験してきました。“In His Presence”という言葉がありますが、信仰者は、イエスの臨在の中で、悔い改め、赦され、癒やされ、慰められ、力づけられ、導かれ、日々の生活を送るのです。私たちもまた、初代の弟子たちと同じように、イエスの臨在の中で、「イエスとともにいて」、力を受けることができます。

二、とりなしの祈り

ペテロとヨハネの大胆さは、第二に、「祈り」、しかも、他の人々がふたりのために祈った「とりなし」の祈りから来ています。使徒 4:23 に「釈放されたふたりは、仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告した」とあります。ペテロとヨ

ハネのために特別な祈りの集まりがあったことが分かります。ペテロとヨハネを支えたのは、そうした背後の祈りだったのです。私たちも神の守りや助けを体験した時、それは、あの人たちが私のために祈ってくれたからだということに気付くことが多くあります。信徒たちは、ペテロとヨハネのことを案じながら祈り、ペテロとヨハネも、留置所の中でも、尋問を受けていた時も、自分たちのために祈ってくれている人々のことを思っていたことでしょう。誰かが自分のために祈ってくれている。そうしたことを知るのは、とても励ましになります。

祈りは人と人を結びつけますが、まことの神に祈る信仰の祈りは、それ以上のもの、人と神とを結びつける力があるのです。祈りは、人を神と結びつけ、人が神からの力を受けることができるようにしてくれるのです。祈りの言葉は、むなしく空気の中に消えていくものではありません。聖書には、いたるところに、神が私たちの祈りを聞いてくださるとの約束があります。神は言われます。「苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。」（詩篇 50:15）それで、この約束を信じる者はこう言うのです。「私は苦難の日にあなたを呼び求めます。あなたが答えてくださるからです。」（詩篇 86:7）。

ヘブル 4:14-16 に、イエスが大祭司として、私たちのためにとりなしてくださっていることが書かれています。私たちの祈りは必ずしも整ったもの、完全にみこころに

かなうものとはかぎりません。不平不満をぶつけるようなものだったり、信仰の欠いたものだったりします。しかし、そのような祈りであっても、イエスがそれをとりなして、みこころにかなう祈りに変え、父なる神に届けてくださるのです。

しかし、それでも、祈れないということがあるかもしれません。そんなときは、聖霊が私たちを祈りに導いてくださり、また、私たちに代わって祈ってくださいます。ローマ 8:26 に「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます」とある通りです。この「聖霊のうめき」は、祈れなくてうめいている人の苦しみを聖霊が分かってくくださり、同じようにうめいてくださることだと考えられます。聖霊のうめきは私たちには聞こえませんが、神には聞こえるのです。

父なる神は喜んで私たちの祈りを聞いてくださり、御子イエスは私たちの祈りをとりなしてくださっています。聖霊なる神は、信仰者の内側から、その霊を励まし、祈りへと導いてくださいます。父・御子・聖霊の神が私たちの祈りのうちに働いてくださっているのです。聖霊によって、御子イエスの名を通して、父なる神に向かう祈りは必ず聞かれるのです。

さらに、同じ父から生まれた神の子どもたちが心を合わせて祈る祈りには、特別な力が働きます。イエスは言

われました。「まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心をつにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。」（マタイ 18:19）ペテロとヨハネのためにはふたりどころか、何百という信仰者たちが心をつにして祈ったことでしょう。祈りの力は、祈りを聞いてくださる神の力なのですが、神は、特別なしかたで、私たちの祈りを神の力とを結びつけ、祈りを、神の力を引き出す「鍵」として私たちに与えてくださっています。大祭司であるイエスは、私たち信仰者ひとりひとりを祭司とし、他の人々のためにとりなす力と努めを分け与えてくださっています。こうしたことは、イエスの復活と昇天、聖霊の降臨によってはじめて明らかになった奥義です。私たちは、この「とりなし」の奥義についてもっと学び、「とりなし」の実践に励みたいと思います。

三、聖霊の満たし

さて、ペテロとヨハネの大胆さは、第三に「聖霊の満たし」によるものでした。使徒 4:7-8 に「彼らは使徒たちを真中に立たせて、『あなたがたは何の権威によって、また、だれの名によってこんなことをしたのか。』と尋問しました。そのとき、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った」とある通りです。「ペテロは聖霊に満たされた」とありますが、これは、ルカ 12:11-12 にあるイエスの言葉の成就です。こう書かれています。「また、人々があなたがたを、会堂や役人や権力者などのと

ころに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配するには及びません。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」ここには、人を恐れず、イエスをあかしする者が聖霊に満たされることが約束されています。ペテロの知恵と力と勇氣は、この聖霊によって与えられたものでした。

「聖霊の満たし」は思ってもみないときに突然与えられるものではありません。使徒たちは「イエスとともにいる」こと、つまり、イエスの臨在のうちに歩みました。多くの人にとりなしの祈りに支えられていました。そして、イエスをあかしするという使命に堅く立ちました。そうした準備や祈りの積み重ねがあって、聖霊の満たしがあったのです。「聖霊の満たし」は信仰をもってイエスに従う時に与えられる恵みです。

ユダヤの指導者たちは、「いっさいイエスの名によって語ったり教えたりしてはならない」（18節）と言い、ペテロとヨハネを脅したうえで釈放しました。そのことを聞いた人たちは声をあげて、「主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。御手を伸ばしていやしを行なわせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行なわせてください」（30節）と祈りました。すると、「その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだし」ました（31節）。「聖霊の満たし」は、ペテロとヨハネのために祈っていた人々にも与えられたのです。そ

れは、人々の信仰の祈りに対する神からの答でした。

イエスの臨在、とりなしの祈り、そして聖霊の満たし。どれも、イエスに従い、イエスをあかしするためになくてならないものです。そのそれぞれについてさらに学び、実践し、また祈り求めていきましょう。

(祈り)

父なる神さま、使徒たちのような知恵と力、勇気を持つために、私たちには、イエスの臨在に生き、とりなしの努めに励み、聖霊に満たされることが必要です。どうぞ、それらを熱心に求め、そこに至る道を学ぶよう励ましてください。そして、それによってイエスをあかしする私たちとしてください。イエス・キリストのお名前です。祈ります。

恵みとまこと

ヨハネ 1:14-18

1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

1:15 ヨハネはこの方について証言し、叫んで言った。「『私のあとから来る方は、私にまさる方である。私より先におられたからである。』と私が言ったのは、この方のことです。」

1:16 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。

1:17 というのは、律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。

1:18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。

イエスがお生まれになった日の出来事を一番詳しく書いているのは、ルカの福音書です。マタイの福音書には、ヨセフへの告知や東方の賢者たちの訪問が書かれています。イエスがお生まれになったその日のことは書かれていません。マルコの福音書にはイエスの降誕のことは全く書かれていません。

では、ヨハネの福音書はどうでしょうか。ヨハネの福音書にはマリアもヨセフも、天使も羊飼いや、また、東方の賢者たちもヘロデ王も登場しません。ベツレヘムという地名も出てきません。けれども、マタイやルカとは全く違った言葉ですが、イエスの降誕が書かれています。それは、14節です。

14節は「ことばは人となった」、「私たちの間に住ん

だ」、「私たちはこの方の栄光を見た」という三つのことを語っています。この三つのことから、クリスマスが、私たちにとって、どんな意味をもっているのかを、ご一緒に考えましょう。

一、人となられたキリスト

「ことばは人となった。」ここで「ことば」と呼ばれているのは、神の御子としてのイエスのことです。なぜ、イエスは「ことば」と呼ばれているのでしょうか。それは、第一に、「ことば」が人の意志や感情を伝えるものだからです。心の中でどんなに相手を思っても、それを言葉にしなければ、相手に伝わりません。同じように、神も人への愛を伝えるために、言葉を尽くして語りかけてくださいました。預言者を通して語ってこられた神は、最後にご自分の御子イエスを通して、その思いのすべてを明らかされたのです。ヘブル 1:1-2 にこうあります。「神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。」

イエスが「ことば」と呼ばれるのは、第二に、イエスがこの世界の造り主だからです。ここで使われているギリシャ語は、「ロゴス」で、それには「論理」や「原理」という意味があって、この世界を成り立たせているものを指します。ギリシャの自然哲学者たちは、この世界が何によって成り立っているかについて考えました。それは「アルケー（はじめ、起源）の探求」と呼ばれま

した。タレスは「万物の根源は水」と言い、ヘラクレイトスは「火」だと言いました。ピタゴラスは「数」と言いました。エンペドクレスは「火、空気、水、土」の四元素が世界を成り立たせていると言い、デモクリトスは「原子」と言いました。それに対して聖書はヨハネ 1:1 で「初めに（エン・アルケー）ことばがあった」と言って、イエスこそが哲学者たちが追求した「アルケー」であると言っています。

紀元前六世紀の哲学者たちが、自然界がいくつかの元素によって成り立ち、また、そこには原子の運動があると考えましたが、それが正しかったことが、今日、証明されています。水素から始まってオガネソンまで 118 の元素が発見され、さらに 55 の元素の存在が予想されています。様々な現象は数式で法則として表されてきました。しかし、これらの元素がどのように生じたのか、それらの法則がどのように定められたのかは、科学によってだけでは知ることはできませんし、証明することもできません。それが科学の限界であり、科学がそれ以上のことを言うなら、それはもはや科学ではなくなります。聖書は、科学によっては知ることができないこと、つまり、見えるもの、見えないもののすべてを造り、それに法則を与え、保っておられるのは、神であり、また、神の御子イエスであると教えています。ヨハネ 1:1-3 に「ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにで

きたものは一つもなかった」とある通りです。その上で、聖書は「ことばは人となった」と、神の御子が人となられたと宣言しているのです。

神話の世界には神々が天界を離れて人間界で暮らすという話がいくらでもあります。日本の神話にも、「天孫降臨」といって、「アマテラス」の孫にあたる「ニニギ」が地上に降り立ち、天皇家の先祖となったという話があります。創造者と被造物の区別のない神話の世界では、神が人になり、人が神になるというのは特別なことではありません。しかし、創造者と被造物の区別をはっきり教えている聖書が、神が人となられたと言っているのは、普通のことではありません。それは人が神になるのと同じようにありえないことで、聖書の教えの根幹を壊してしまうようなことなのです。しかし、事実、このありえないことが起こりました。「ことばは人となった」のです。ほんとうに神が人となり、造り主が被造物になったのです。これは、私たちの理解を超えた出来事、世界の創造以来、ただ一度だけ起こった、特別なことなのです。

クリスマスは、一般に考えられているように、世界で一番尊敬されている人、イエスの誕生日というわけではありません。それは、神であるお方が人となられたという奇蹟が起こった日です。奇蹟といえども、それはすべて造られた世界の中での出来事ですが、神の御子の降誕は、世界を創造されたお方が造られた世界の中に入って来られたということ、永遠の世界とこの世界との間に起

こった奇蹟以上の奇蹟だったのです。クリスマスは、神が人となられたという、とてつもない出来事に驚き、「なぜ神の御子が人となってこの世に来られたのか」を考え、その答を見つける時なのです。

二、人と共に住まわれるキリスト

次に、「私たちの間に住まわれた」という部分ですが、これは、神の御子が人となってこの世に来られた理由を言っています。神の御子が人となってこの世に来られたのは、「私たちの間に、人々と共に住む」ためだということです。この「住まわれた」（スケーノオー）という言葉には「テントを張る」という意味があります。イスラエルの祖先たちは、牧畜を生業にしていたので、家畜の移動と共に人々も移動し、行く先々にテントを張って生活しました。イスラエルがエジプトから救い出され、荒野を旅したときも、人々はテント生活をしました。その時の神の宮、神殿もテント式で「幕屋」と呼ばれました。神の「幕屋」は、人々とともに移動し、イスラエルを導き守りました。その後、神殿は立派な建物になったのですが、聖書は「神の御子は私たちの間にテントを張った」と言うことによって、荒野で、幕屋が常にイスラエルの人々と共にあったことを思い起こさせ、神が私たちの身近かにいてくださることが強調されています。神が社会的な身分、立場、能力、貧富の差などに関係なく、神を信じる者と共にいてくださることを、私たちに教えてくれます。実際、イエスはこの世の忘れられたような人々をも心に留め、その人たちと共に歩まれ

ました。

ところで、子どものために書かれたものですが、サンタクロースとキリストとをくらべたリストを見つけました。こうありました。

サンタは年に一度だが、イエスはいつでも助けてくださる。

サンタは靴下に物を入れるが、イエスはすべての必要を満たしてくださる。

サンタは煙突から勝手に入ってくるが、イエスはドアをノックし、私たちが招き入れると入ってきてくださる。

サンタに会うには行列に並ばなければならないが、イエスはお名前を呼べば側に来てくださる。

サンタは私たちを膝に載せてくれるが、イエスはその腕の中に休ませてくださる。

サンタは「Ho、Ho、Ho」としか言わないが、イエスは健康（health）と、助け（help）と、希望（hope）をくださる。

サンタは「泣かないで」と言うが、イエスは「心配事をわたしに任せなさい。わたしがあなたの世話をする」と言われる。

サンタは私たちを笑わせてくれるが、イエスは私たちに喜びをくださる。そして、その喜びは私たちの力になる。

そして、そのリストには「サンタは北極に住んでいるが、イエスはどこにでもおられる」とありました。キリストは、私たちと共にいて、私たちの救いとなり、助けとなるため、「人となって、私たちの間に住まわれ」ました。クリスマスは、今も、私たちの側近くに、私たちと共にいてくださるイエス・キリストを見つけ出す日なのです。

三、神の恵みであるキリスト

さて、14節の最後の部分は「私たちはこの方の栄光を

見た」ですが、その後、「父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた」と続けています。栄光とは神のご性質の表れなのですが、ここでは、神の「全知」「全能」「永遠」「不変」などの栄光ではなく、神の「恵みとまこと」の栄光が語られています。

ヨハネ 1:17に「律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現した」とあって、「律法」と「恵み」が対比されています。律法は神の「聖さ」や「正しさ」を表し、私たちに、聖くあること、正しくあることを要求します。しかし、私たちは律法の通りに聖く、正しく生きることができませんでした。恵みによって罪を赦していただき、新しくされてはじめて、聖さや正しさを目指して生きることができるようになりました。では律法はいらないのでしょうか。いいえ、律法がなければ、自分の罪が分からず、恵みを求めることもできません。また、律法がなければ、聖さや正しさの具体的な目標を見失ってしまいます。しかし、律法には罪を赦し、人を罪からきよめる力はありません。旧約時代の人々も、罪の赦しやきよめの恵みを知らなかったわけではありませんが、それは部分的なものでした。罪の赦しやきよめの恵みはイエス・キリストによってはじめて、完全な形で示されたのです。

さきほどのサンタクロースとキリストを比べたりリストの中に「サンタはツリーの下にギフトを置くが、イエスはご自分がギフトになり、十字架の木の上で死なれた」

というのもありました。ヨハネ 3:16 に、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された」とあるように、神は、イエスご自身を私たちへの愛の贈り物、「恵み」そのものとして、与えてくださったのです。ヨハネ 3:16 はイエスの十字架を指していますが、クリスマスはイエスが十字架への第一歩を踏み出された日ということが出来ますから、ヨハネ 3:16 はクリスマスの御言葉でもあるのです。

「恵みとまこと」という言葉の組み合わせは、神の恵みがまことの恵みであること、つまり、真実で変わることはない恵みであることを意味しています。ヨハネ 3:16 の後半が「それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」と言っているように、神の救いの恵みは決して変わることなく、信じる者はかならず救われ、永遠のいのちに至るのです。

「私たちはこの方の栄光を見た」の「見た」（セアオマイ）という言葉は "theater" の語源になっている言葉です。イエスは、ご自分の生涯を「劇場」にして、私たちに神の栄光、恵みの栄光を見せてくださいました。18 節に「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである」とあるように、イエスは私たちに、神を、神の恵みを見せてくださっているのです。

今年のクリスマス、私たちは何を見るのでしょうか。私たちは、クリスマスがサンタクロースの日でも、年末の行事でもないこと、また、イエスの誕生パーティでもな

いことを知っています。そうしたのではなく、聖書のクリスマスを手静かに想い見ましょう。「天に栄光、地に平和」と歌った天使たち、「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです」とのメッセージを聞いてベツレヘムに急いだ羊飼いたち、家畜小屋のマリアとヨセフのことを想いみるのですが、何よりも見つめなければならないのは、飼葉桶に寝かせられた赤ん坊のイエスです。このイエスのうちに、神が人となられ、私たちと共に生き、そして私たちのために救いを成し遂げてくださった「恵みとまこと」が輝いています。それをしっかりと見つめましょう。クリスマスはじつに、イエス・キリストにある「恵みとまこと」を、また、「恵みとまこと」に満ちたイエスを信じ、受け入れる時です。その時、私たちは、信じる者の生涯に神の「恵みとまこと」が満ちるのを見ることができるようなのです。

(祈り)

父なる神さま、あなたがクリスマスにしてくださったことは、私たちの理解を超えています。しかし、それは、私たちがあなたの「恵みとまこと」に与るためでした。「恵みとまこと」であるイエスを心に迎えます。このクリスマスに、私たちをあなたの「恵みとまこと」で満たしてください。人となられた神の御子、イエス・キリストのお名前です。

生ける望み ペテロ第一 1:1-5

1:1 イエス・キリストの使徒ペテロから、ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤ、ビテニヤに散って寄留している、選ばれた人々、すなわち、

1:2 父なる神の予知に従い、御霊の聖めによって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ。どうか、恵みと平安が、あなたがたの上にもますます豊かにされますように。

1:3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。

1:4 また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。

1:5 あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。

ペテロは、この手紙を「イエス・キリストの使徒ペテロから」（1節）という言葉で始めています。最初に差出人が名乗りをあげるのが、当時の手紙の公式の書き方だったからです。ローマ人の手紙からユダの手紙まで、新約聖書には21の手紙がありますが、それは今日の「手紙」とはずいぶん違っています。「手紙」というよりは、手紙に書かれた「教え」であり、手紙によって届けられた「説教」だと言ったほうがよいでしょう。ペテロが自分を「イエス・キリストの使徒」と呼び、そのよう

に書いたのは、この手紙がプライベートなものではなく、イエス・キリストの教えであり、小アジア各地の教会に回覧され、礼拝で朗読されることを前提にして書かれたからです。

差出人に続いて「Pont、ガラテヤ、カパドキヤ、アジア、ビテニヤに散って寄留している…選ばれた人々へ」（1-2節）と、受取人が書かれています。ここには、イエス・キリストを信じる者が「選ばれた」と言われていますが、続く3-4節では「新しく生まれた」、そして5節では「守られている」と言われています。きょうは、キリストを信じる者が、「選ばれている」、「新しく生まれている」、「守られている」と言われていることの意味を学びましょう。

一、選ばれている

キリストを信じる者は第一に、「選ばれて」います。最近では日本でも「アスリート」と呼びますが、以前は、スポーツ競技に出場する人を「選手」と言ったものです。地域の競技会や全国大会に選ばれ出場できれば栄誉なことですが、国際的な競技会に出場したり、そこで入賞すれば、大きな誇りとなります。文学や芸術、芸能の世界でも、作品が選ばれたり、パフォーマンスが認められたら、そこからプロフェッショナルへの道が拓けてくるでしょう。どんな分野でも、「あなたは選ばれています」と言われてうれしくない人ありません。それは栄誉なことであり、特権です。人によって選ばれてできえ、そうなら、神によって選ばれることには、どんなに大き

な榮譽となり、特権であることでしょうか。キリストを信じる私たちは神に「選ばれた者」ですが、神は、なぜ、何のために私たちを選んでくださったのでしょうか。

2節に「父なる神の予知に従い、御霊の聖めによって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々」とあるように、私たちは、イエス・キリストの十字架の血により罪を赦され、聖霊によって聖められ、キリストに従って生きる者になるようにと選ばれました。つまり、キリストの救いを受けるようにと選ばれたのです。

では、なぜ、私たちが選ばれたのでしょうか。それは誰にも分かりません。聖書は、「父なる神の予知に従い」としか語っていません。人間は神の知恵・知識・思いを完全に知ることができません。しかし、ひとつ言えることは、私たちが選ばれ、救われたのは、自分の力によってではないということです。私たちが救いに選ばれたのは、他の人より優れていたからでも、信仰深かったからでもありません。キリストを信じたほとんどの人たちはみな、ごく普通の人々でした。弱さを抱えていた人たちのほうが多かったかもしれません。皆が素直な人ばかりでなく、頑固で疑い深い人たちもいました。イエスが選んだ十二弟子にもそのような人たちがいたではありませんか。そんな私たちが選ばれたのは、その選びを通して、神の恵みと力が現されるためでした。私たちが「選ばれた人々」と呼ばれているのは、とても感謝なこと、

ありがたいことですが、だからといって、私たちは、そのことで誇ることはできないのです（コリント第一 1:26-29 参照）。

かつて神の民として選ばれたイスラエルの人たちは、自分たちが選ばれたのは、自分たちが優れているからだと考え、他の民族を見下すようになりました。間違った「選民意識」を持ち、高慢になり、神の選びから離れていきました。聖書はそのことを戒め、イスラエルが神に選ばれたのは、強く、大きかったからではない。その先祖は家畜を追って移り住む遊牧民であり、エジプトで奴隷であった。神がイスラエルを選んだのは、そのような小さく貧しい人々が、まわりの強く大きな国々の圧迫や支配から守られ、豊かな国になっていくことによって、神の力を現すためであったと言っています（申命記 7:7-8 参照）。私たちも、神が私たちを選んでくださらなければ、自分から神を選ぼうとしなかったでしょう。そして、救われることはなかったでしょう。神の選びを知れば知るほど、私たちは、へりくだって、神の栄光をたたえずにはおれなくなります。

そして、救われた私たちは、自分たちが救われたことに満足して終わるのでなく、他の人々の救いのために奉仕するようになるのです（ペテロ第一 2:9 参照）。この手紙は、「ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤ、ビテニヤに散って寄留している、選ばれた人々」のために書かれました。「散って寄留している人々」というのは、迫害を受け、財産を奪われ、自分たちの国から追われて

いったキリスト者たちのことを言います。英語の聖書では「寄留している、選ばれた人々」というところを“Elect Exiles”（選ばれた難民）と訳しています。人間的に考えれば、町に残っている人が「選ばれた人々」で、国外に追放された人々は「選ばれなかった人々」です。しかし、神の目から見れば、国外に散らされていった人々こそが「選ばれた人々」でした。迫害を受けキリスト者たちは、散らされて行った先々で、その困難にもかかわらず、イエス・キリストを宣べ伝え、それによって、まわりの人々が救われていきました。迫害が、かえって福音が広まるのを助けたのです。散らされた人たちは、困難な中でも、神の選びを忘れませんでした。それによって励まされ、選ばれた者としての使命を果たしました。私たちも神に選ばれたことの意味を深く考えましょう。それを感謝し、喜び、大切にしましょう。そして、それに応えていきましょう。

二、新しく生まれた

キリストを信じる者は第二に、「新しく生まれた」者です。3節に「神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました」とあります。「新しく生まれる」とはどういうことでしょうか。私たちは「生まれ変わった気持ちで、やり直す」といったことを口にしたり、耳にしたりしますが、「新しく生まれる」というのは、そういった人間の努力のことを言っているのでは

ありません。「新しく生まれる」というギリシャ語には「上から生まれる」という意味もあります。「上から」、つまり、神によって生んでいただくということです。この命は、「イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって」とあるように、イエスの復活によって私たちに与えられます。言い替えれば、罪の中に死んでいた私たちが、イエスと共に新しい命に復活するということです。私たちはイエス・キリストを信じたとき、神によって生んでいただき、神の子どもとなります。キリストと共に復活し、聖霊によって新しい性質を与えられ、神の言葉に養われて成長していく者とされました。「新しく生まれる」ことから信仰生活が始まります。

神が、私たちに与えてくださる新しい命は「永遠の命」と呼ばれています。私たちは皆「寿命」というものを持っています。寿命は生まれたときは100パーセントですが、時が経つと減って行って、やがてゼロになって、この地上を去るのです。しかし、神がくださる命は決してなくならない、永遠のものです。それは、最初は小さなものですが、寿命のように減っていくのではなく、増え続けていくのです。文字通り、永遠に増え続けるのです。寿命が尽きても、信仰者には永遠の命があり、この命によって永遠を、神の国で、神と共に生きるのです。

さきほど、この手紙は迫害を受け、財産を奪われ、国外追放にあった人々に宛てて書かれたと言いました。4節の「また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこと

もない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです」という言葉は、まさに、そのような人々のために書かれた言葉です。地上の財産を失ったとしても、それ以上の資産が天にある、地上の命が尽きても、永遠の命に生かされる。聖書が「生ける望み」と言っているのは、そのようなことなのです。

「永遠の神の国」、「天にたくわえられた資産」、そして「永遠の命」と言っても、地上では、そうしたものを、実感したり、手にとるように理解するということは難しいことだと思います。しかし、神が、私たちに信仰とともに与えてくださった「望み」は「生ける望み」、つまり、私たちを生かしてくれる望みであり、「新しく生まれた」者は、この望みによって生かされるのです。

「生まれ変わった気持ちになる」ような決心を、何度くりかえしても、同じ罪や失敗、弱さに、再び、逆戻りしてしまいます。そんな自分の無力を正直に認め、「イエス・キリストを信じます。私をあなたの子どもとしてください」と願い、「新しく生まれた者」となって、この「生ける望み」をいただきましょう。そして、この望みによって、永遠の命を確信しましょう。新しく生まれ、永遠の命を与えられている。この事実を受け入れるとき、私たちは、この希望によって、この世を全く新しく、力強く生きていくことができるのです。

三、守られている

キリストを信じる者は、第三に、神に「守られて」い

ます。5節に「あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです」とある通りです。神はキリストを信じる私たちを選んで、他の人々に救いの言葉を伝える使命をくださいました。私たちを新しく生み、天を目指す新しい生活を与えてくださいました。しかし、私たちは、与えられた使命が重要なものであればあるほど、また、その生活が永遠につながるものであるということを知れば知るほど、「自分にそうしたことができるのだろうか」と心配になります。

そんな時、もし、私たちが、自分の力でなんとかしようとしたら、かならず失敗します。神を信じない人たちは、不安を感じると、自分に鞭打って、より完璧にものごとをやりとげ、不安を解消しようとしています。しかし、完璧に物事をできる人など誰もいませんから、不安は解消しません。もっと増えます。それでさらに自分を鞭打つようになるのですが、そうしたことを続けていると、いつか疲れ果て、人生に行き詰まってしまいます。神を信じる者は、自分で自分の不安を解消するのではなく、神の守りを信じ、神の助けを求め、神からの平安を受けて、解決するのです。

ペテロ第一4:19に「ですから、神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行なうにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せしなさい」と教えられています。ここに「真実であられる創造者」とありますが、神はあらゆるものの創造者で

す。世界を創造された全能の力で、信じる者を守ってください。また、神は「真実なお方」です。神はご自分の約束を最後まで守り通されます。神はその全能の力とともに、その「真実」によっても、信じる者を守ってくださるのです。コリント第一 10:13 に「神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に合わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます」、テサロニケ第二 3:3 に「しかし、主は真実な方ですから、あなたがたを強くし、悪い者から守ってください」と、神の真実が教えられています。私たちは、この真実な神によって守られているのです。真実な神が、ご自分が選んだ者、ご自分が生んだ子どもたちを、守り、助けてくださらないはずがありません。この神の真実に信頼しましょう。真実な御言葉の約束を握りしめましょう。そして神がくださった「生ける希望」をもって新しい日々に向かいましょう。

(祈り)

父なる神さま、あなたは、御言葉によって、私たちが「選ばれ」「新しく生まれ」「守られている」ことを教えてくださいました。聖書を開くたびに、あなたの、私たちに對する愛と真実の呼びかけを、しっかりと聞き取り、あなたの呼びかけに答える者としてください。イエスの御名で祈ります。

仏教が日本に伝えられたとき、崇仏派（蘇我氏）と排仏派（物部氏、尾張氏、中臣氏）が争いましたが、それは政治的なもので、仏教はその優れた文化によって、人々の間に受け入れられました。日本人は外来のものに対して決して閉ざされた心を持っていませんでした。その後仏教はもともと日本あったもののようにして、日本に定着しました。

仏教の側からは、日本の神々は仏の仮の姿であるとされ、神道の側からは仏は神々のひとつであるという解釈がなされるようになりました。そして、神道の主神、天照大神と大日如来が同一視され、「神仏習合」が起きました。「神と仏」が区別なく受け入れられたのです。日本人は外来の仏教を受け入れ、古来の神道とうまく融合してしまいましたが、それは、日本人の特性によるとともに、神道の汎神論的な性格にもよると思われます。

神道では、神々も含め、物事は「自ずと成った」ものであり、神によって造られたものとは考えません。聖書が教えるように、おひとりの創造主が、ご自分以外のすべてのものを造り、それを支え、治めておられるとは考えません。様々な神々がいて、この世の様々な出来事を引き起こし、人々の様々な必要に応えると考えます。神と人、人と物との区別は曖昧で、すべてに神が宿ると考えます。そのような考え方によると、聖書の神も、神々のひとりに過ぎないことになります。神を「愛の神」、キリストを「愛の人」として受け入れることはあっても、神を唯一の神、キリストをただひとりの救い主として受け入れることは、日本人にとっては困難なことなのです。



Penguin Club

www.penguinclub.net